

天神堂遺跡の礫群・配石

保坂康夫

-
- | | |
|----------|-------------------|
| 1. はじめに | 4. 配石の属性 |
| 2. 資料の現状 | 5. 天神堂遺跡の礫群・配石の特徴 |
| 3. 礫群の属性 | |
-

1. はじめに

南巨摩郡南部町(旧富沢町)万沢の天神堂遺跡は、1970年に発見され、同時に発掘調査された旧石器時代後期の遺跡である。遺跡は万沢小学校の校庭にあり、当時小学校4年生の新井正樹氏によって黒曜石製の石刃石核が採集され、それを旧石器時代のものと見抜いた母親の新井秀子氏が町や働きかけ、当時山梨の旧石器研究を推進していた山本寿々雄氏に連絡し、町長の英断で発掘調査や一部保存が実現した。発掘調査は、山本氏の指導のもと、当時進められていた町誌編纂室の担当者が中心となって、町民主体による発掘調査が8月8日から12日にかけての5日間で実施された。240m²の対象地域にグリッドが設定され、特に南側の84m²について遺物の出土位置の実測がなされる高精度の調査が実施された。その後、出土遺物の実測がなされ、町誌編纂室により翌年の1971年3月に報告書が刊行された¹⁾。

出土遺物については白石浩之氏²⁾、小林広和氏、里村晃一氏³⁾などの注目することとなったが、その全体像が明らかになったのは伊藤恒彦氏の再整理による⁴⁾。なお、筆者も天神堂石器群の特徴である槍先形尖頭器の評価をめぐる論議⁵⁾を行っている。

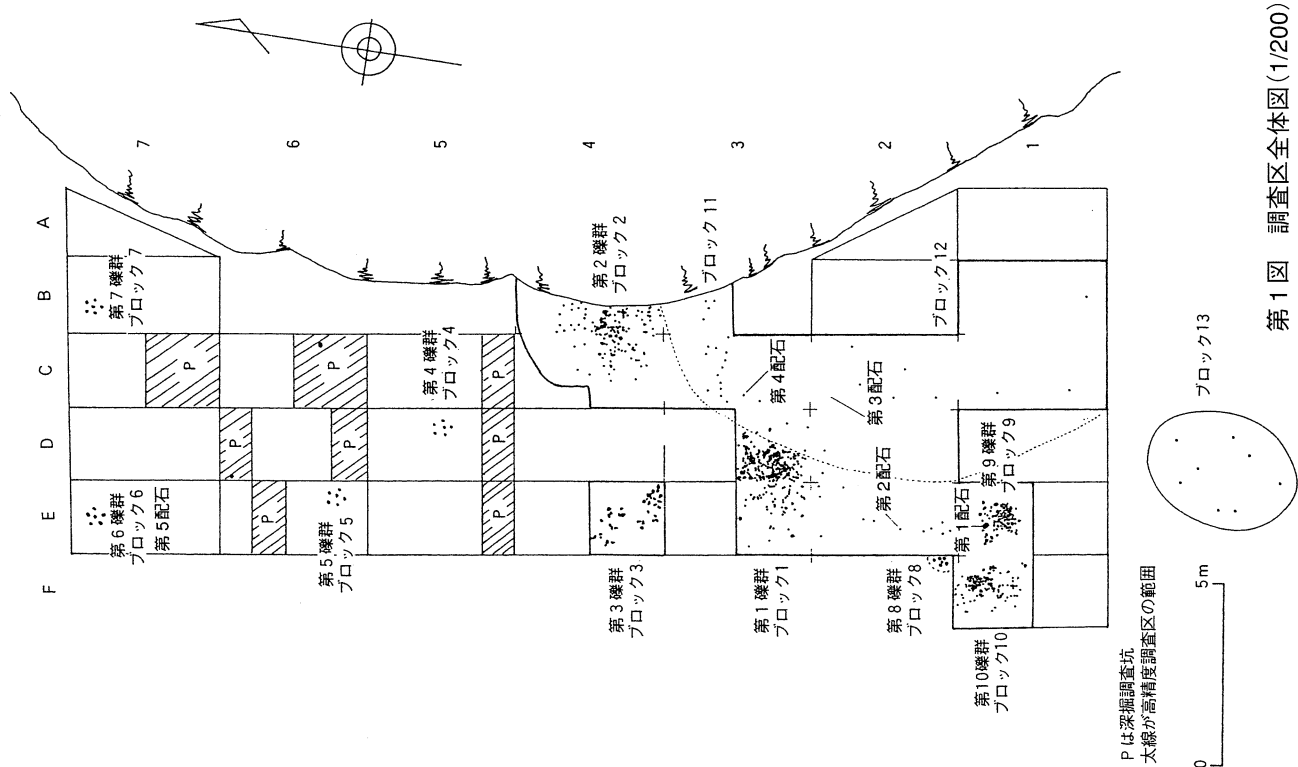
筆者は1997～2002年にかけて行われた町誌編纂事業に参加する機会を得て、報告書では十分記載されていなかった発見から発掘、報告書作成にいたる経過を、保管されていた発掘時の記録・写真等の資料や当時の参加者に取材するなどして検討した⁶⁾。その成果をもとに遺物平面分布の再検討を行うとともに、黒曜石製石器・剥片について望月明彦氏や池谷信之氏とともに産地分析を実施した⁷⁾。

ここでは、これまでに詳細が報告されていない礫群・配石について記載する。天神堂遺跡の礫群は県内では最初の発見例で学史的に重要であるとともに、県内では権現堂遺跡(南部町)、丘の公園第2遺跡(高根町)と3遺跡しか確認されていない希少例でもある。

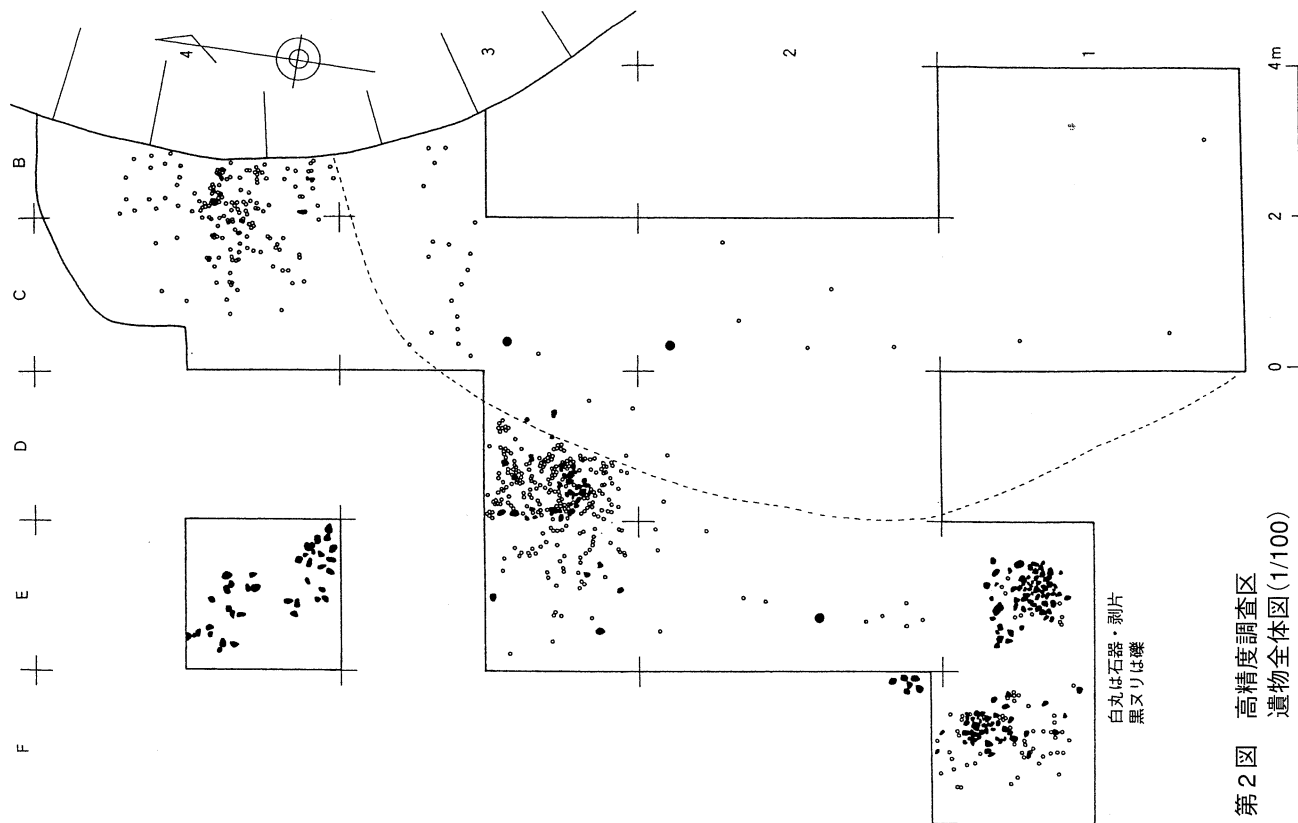
2. 資料の現状

現在保管されている天神堂遺跡出土遺物は、石器・剥片類が936点(ナイフ形石器35点、槍先形尖頭器7点、彫器5点、石錐1点、削器1点、楔形石器2点、石核10点、敲石2点、剥片873点)と礫98点(第5礫群構成礫54点、第8礫群構成礫31点、配石構成礫5点、ブロック内出土礫8点)の総計1034点が確認できる。また、第1礫群については1×1mほどが土層ごと切り取られ県立考古博物館に常設展示されている。

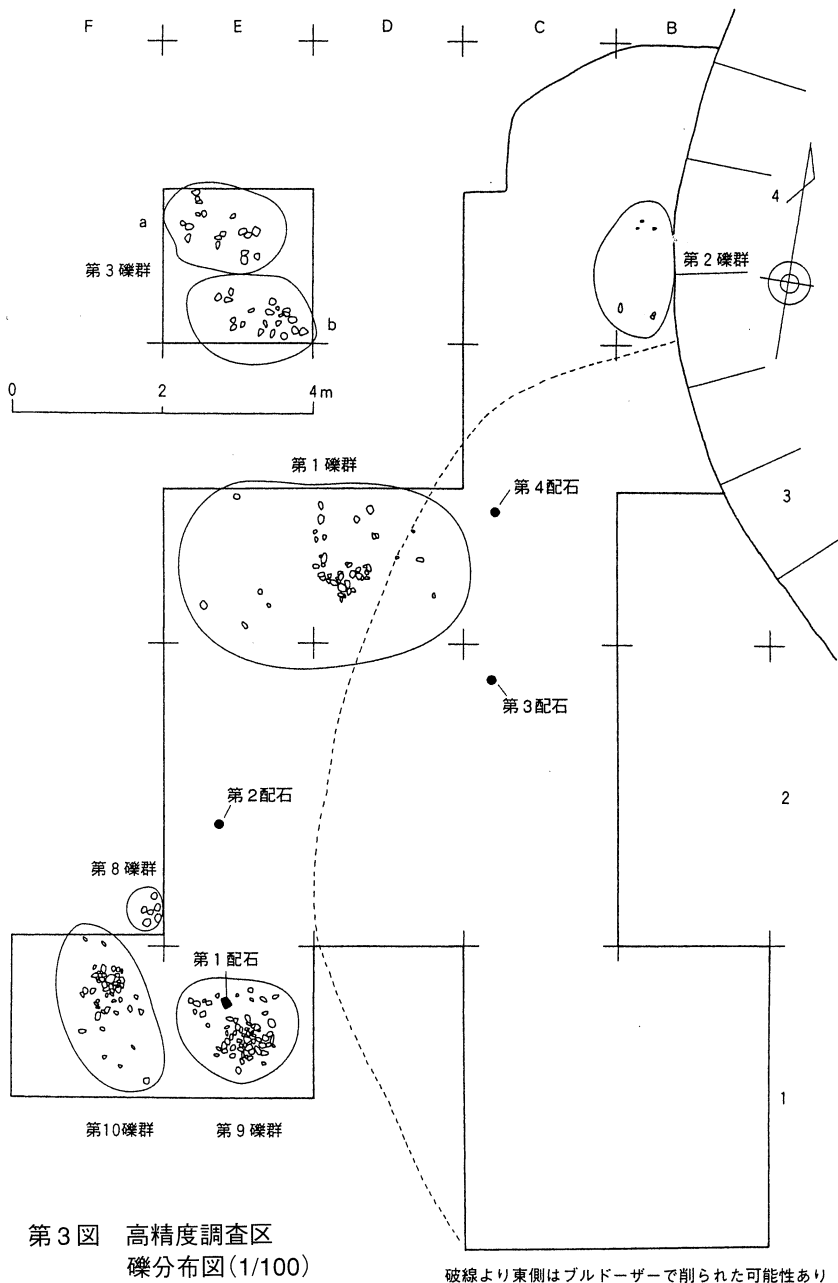
報告書によると、礫群は第1礫群から第10礫群までの10基まで番号がつけられている(第1図)。この内、第1・2・3・9・10号礫群については1/4縮尺の平面実測図が報告書に添付されており構成礫の平面分布状況が確認できる。第4図はこの1/4縮尺添付図を原図として石器・剥片を削除し、礫の輪郭だけをトレースしたものである。また第1～3図はこの図を縮小し報告書の遺物・遺構分布図(報告書図版4、P40)の所定の位置に貼り付け、発掘時の写真から高精度調査範囲を推定記入したものである。



第1図 調査区全体図 (1/200)



第2図 高精度調査区遺物全体図 (1/100)



第3図 高精度調査区
礫分布図(1/100)

破線より東側はブルドーザーで削られた可能性あり

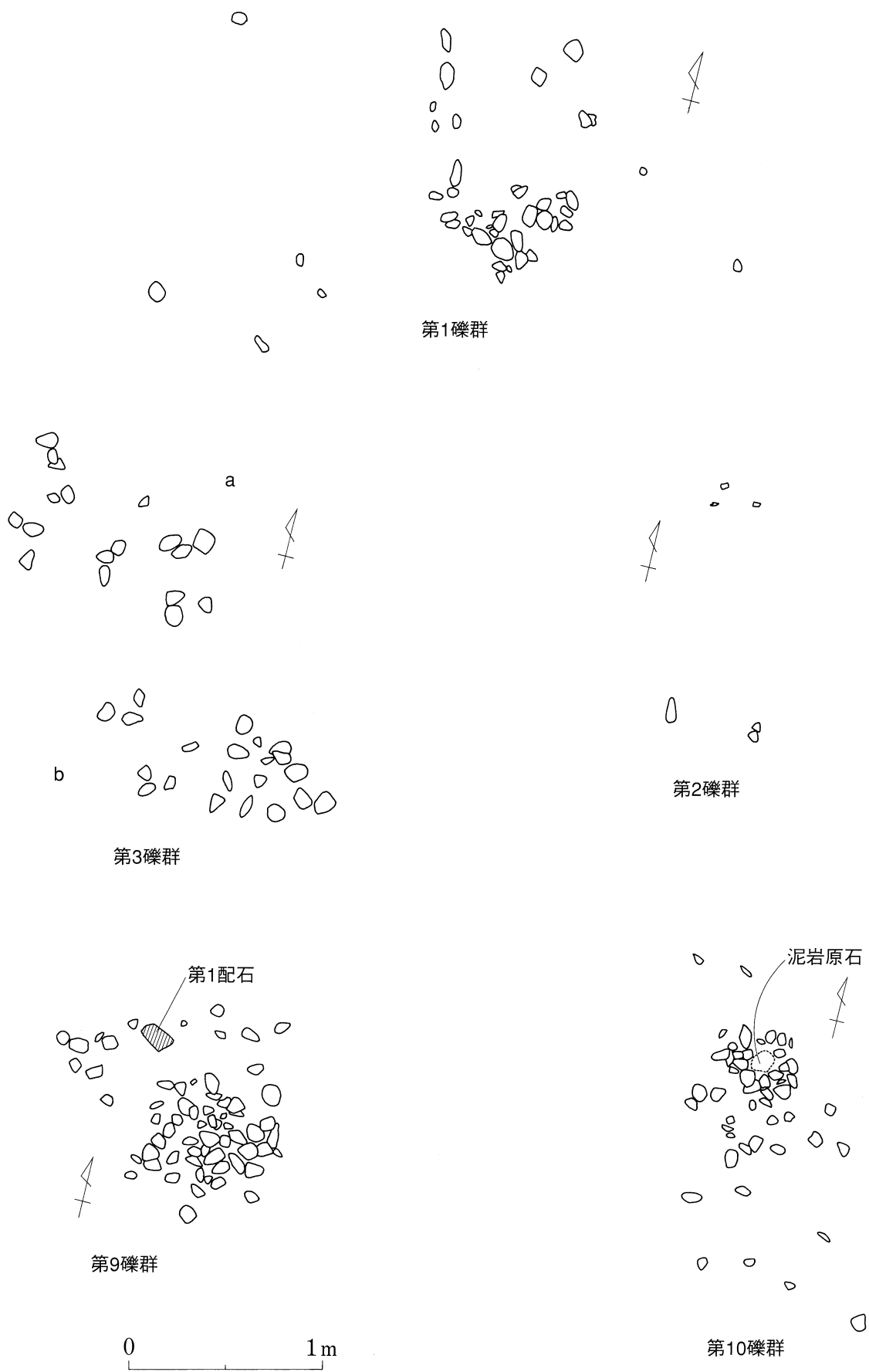
第1 礫群については先述のとおり、構成礫の多くは取り上げられず土層ごとに取り上げられ保管されている。第2 礫群については、残された実測図等から確認できる礫数は6点であり、内1点のみが現存する。第3 礫群は構成礫は現存しない。第9・10 礫群については発掘以後にコンクリートブロックで小屋がけされ現地保存されていたが、現在ではそれが撤去され礫群も所在不明となっている。実測図から確認できる構成礫数は、第1 礫群48点、第2 礫群6点、第3 礫群39点(分布図からa-18点、b-21点の2群に区分できる)、第9 礫群65点、第10 礫群50点である。なお、第9 礫群には配石が1点伴っている。また、第10 礫群の中央部には石器石材の泥岩原石が1点(石核としてカウント)見られる。2枚の剥離が見られ、重量968gで非焼けである。これは礫群構成礫にはカウントしていないが、分布図を見ると周りの礫を排除して礫群の中央に据えられたか、他の礫群構成礫と一緒にまとめられたといった状況が認識でき、礫群との一体性が伺える興味深い出土状況である。第4・6・7 礫

群については平面図はなく、遺物は石器・剥片は確認できるものの、現在保管されている遺物からは礫群構成礫は確認できない。第8 礫群については分布図はないものの、出土地点が調査区全体図に記入されていた(第1・3 図)。第5・8 礫群については、南部町(旧富沢町)教育委員会が管理する倉庫内に礫群構成礫と配石4基の構成礫が保管されていた。

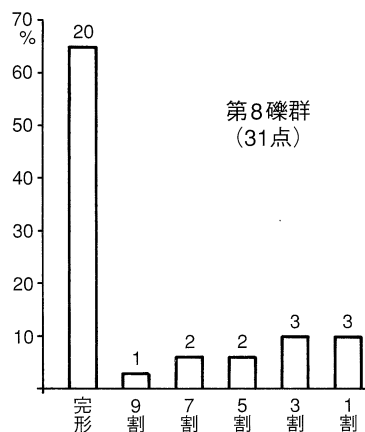
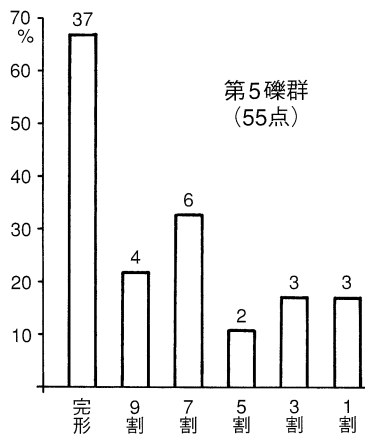
天神堂遺跡の礫群は石器・剥片の分布も含んで命名されており、必ずしも礫群とは限らずブロックのみの場合も考えられる。現状で確認できる礫群は、第1・2・3・5・8・9・10 礫群の7基であり、構成礫そのものが現存するのが第1・5・8 礫群の3基である。第4・6・7 礫群は石器・剥片のみの分布であるブロックであった可能性がある。

3. 礫群の属性

ここでは現存する礫群構成礫について記載する。第5 礫群については、54点の構成礫が確認された。内5点



第4図 礫群平面図(1/30)



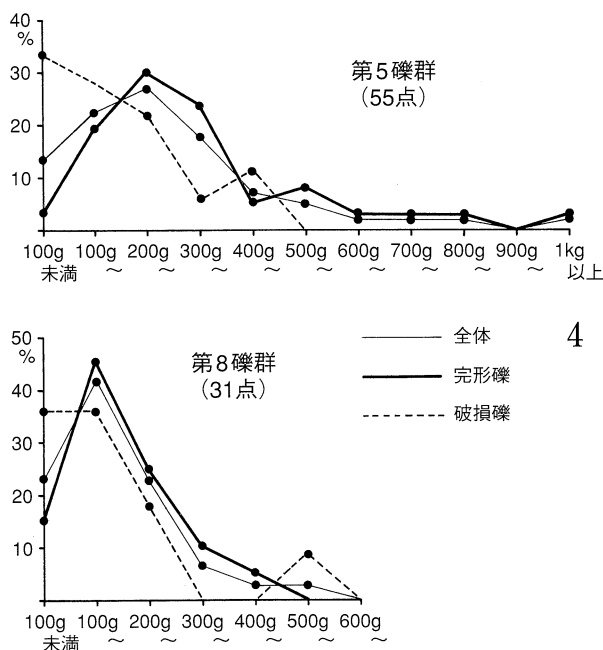
第5図 礫群構成礫の完形度

は複数の礫が接合した礫で、接合状態で1点としてカウントしている。総重量 14760g、平均重量 273g。石質は砂岩 49 点、礫岩 3 点、安山岩 2 点である。7 割弱の 37 点が完形礫であり、破損礫は 9 割から 1 割までの完形度が見られる (第5図)。完形礫の平均重量は 321g。円礫から亜円礫の円磨度の礫で、スス状付着物 7 点、タール状付着物が 3 点の礫に見られる。重量構成を見ると完形礫が 200g 台が最も多く、800g 台まで分布が見られる。第6図では配石もグラフに加えたが重量が 2280g あり、礫群構成礫と 1kg 以上の開きがある。

第 8 礫群は 31 点が確認された。総重量 5656g、平均重量 182g。石質は砂岩 26 点、礫岩 3 点、安山岩 1 点、粘板岩 1 点である。完形礫が 6 割強の 20 点であり、他の完形度の礫が少ないながらもほぼ均等ににある。完形礫の平均重量は 192g。円礫から亜円礫の円磨度の礫で、スス状付着物 2 点、タール状付着物が 2 点の礫に見られる。重量構成では完形礫が 100g 台が最も多く、400g 台まで分布する。

両者を比較すると、石質では砂岩を中心とし、円礫から亜円礫を礫を用い、完形度では完形礫が 6～7 割と多い点が共通するが、重量構成で違いが見られる。第 5 礫群がやや重い礫を主体としており、当初持ち込まれた礫の特徴を示す完形礫の平均重量では第 5 礫群が 321g、第 8 礫群が 192g と 130g もの開きがある。総重量も第 5 礫群は第 8 礫群の 3 倍近くある。

なお、第 2 礫群構成礫で唯一現存する礫が 1 点ある。BC・T-6・97 の注記があり、295g の完形焼け礫で砂岩である。



第6図 礫群構成礫の重量分布

4. 配石の属性

配石は 5 基が確認できる。報告書の段階では配石は認識されていなかった。ここでは、現在確認できる 1kg 以上の礫を配石として区分し記載したい。第 9 礫群の礫は先述のとおり現地保存されていたものの、その後覆い屋の撤去で所在不明となったが、その内、大型の礫 1 点が役場庁舎内の展示ケースの中に保管されていた。1197g の非焼け完形礫で砂岩で亜角礫である。E-1・T-6・13 の注記がある。これを第 1 配石とする (第 1・3 図)。E-2・6 と注記された非焼け完形礫で亜円礫の砂岩。重量 6850g と最も重い。第 2 配石とする。C-2・6 と注記された非焼け完形礫で亜円礫の砂岩。重量 1340g。第 3 配石とする。ただし、出土位置については記録がないが、出土状態の写真からおおむねの位置を判断した。C-3・2 と注記された非焼け完形礫で円礫の砂岩。重量 4380g。第 4 配石とする。後世の攪乱溝の近くから出土してい

るが、出土状態の写真などから溝の外から出土していると判断した。E-6グリッドの第5礫群として取り上げられた礫の中に、2280gの完形焼け礫で円礫の砂岩があった。礫群構成礫とは大きさがかけ離れており配石として区分した。第5配石とする。

石器・剥片の分布との関わりを見ると、礫群に伴うように近接するもの2基(第1・5配石)、ブロック内に位置するもの1基(第2配石)、ブロックや礫群から離れた位置に点在するもの2基(第3・4配石)の3種類が見られる。

5. 天神堂遺跡の礫群・配石の特徴

天神堂遺跡の礫群は県内で最初に発掘調査され確認された礫群であり、学史的に重要である。報告書の記述から、やや窪む掘り込みを伴うものとして報告され、そうした礫群として注目されたことがあるが、出土レベルの記録がなく正確な分析を経たものかは疑問であり、出土状況の写真から判断して礫群についてはそうした状況は見取れない。おそらく、遺物分布が上下幅をもって出土したのを掘り込みと誤認したものと思われる。

資料の現存状況や記録から、礫群7基、配石5基が確認できた。礫群はいずれもブロックと重複している。この内、密集型の第9礫群には石器・剥片が分布するもののその数が極めて少なく、礫群の周囲に分布しており、密集型礫群に重なるブロックの標識的なあり方を示している。また、配石は礫群に伴うように近接するもの2基、ブロック内に位置するもの1基、ブロックや礫群から離れて位置するもの2基が見られ、この時期の遺跡で見られる礫群・配石のあり方をすべて示しており、やはり標識的なあり方である。

今回確認された第5・8礫群の礫は、完形礫の重量分布が示すように採取基準が異なることが推定された。礫採取地点の礫重量組成の違いを反映しているとか、機能する対象の違いであるとか、採取に当たった人間の違い(大人と子供、女性と男性など)といった解釈も可能である。

天神堂遺跡の現存する礫群・配石構成礫は学術的価値が高く、将来に向けて大切に保存すべき重要な資料である。

なお、礫群・配石構成礫および、石器・剥片等の資料は全て県立考古博物館に寄宅されており、当面の間は当館が管理している。

謝 辞

本稿を草するにあたり、富沢町(現南部町)教育委員会および当教育委員会の遠藤一明氏、富沢町誌編纂室の望月安子氏にご助力いただいた。記して御礼申し上げる次第である。

註

- 1) 富沢町誌編纂室 1971『天神堂遺跡』
- 2) 白石浩之 1974「尖頭器出現過程における内容と評価」『信濃』第26巻台1号
- 3) 小林広和・里村晃一 1976「山梨県富士川下流域出土の初期尖頭器について」『古代文化』第28巻第4号
- 4) 伊藤恒彦 1979「天神堂遺跡石器群の再検討」『甲斐考古16の2』
- 5) 保坂康夫 1999「山梨県富沢町天神堂遺跡における両義的石器の認識と位置づけ—ナイフ形石器と尖頭器の狭間—」『県史研究』第8号
- 6) 保坂康夫 2002「旧石器時代の富沢町」『富沢町誌』
- 7) 保坂康夫・望月明彦・池谷信之 2003「石材管理と石器製作—山梨県天神堂遺跡の黒曜石産地推定と原産地クラスターの抽出から—」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第11集